

男子看護学生の母性看護学実習に対する思いと学びの調査

A survey about feeling and learning of male nursing students
in clinical training of maternal nursing

原 理沙 奥原 香織 横山 芳子
Risa HARA Kaori OKUHARA Yoshiko YOKOYAMA

要旨

母性看護学実習では、女性にとって羞恥心の大きい部位への看護介入が多く、男子看護学生は見学やケアの実施に同意を得られない場合がある。男子看護学生からも母性看護学実習に対する不安や羞恥心といった思いを聞くことも多かった。本研究では、男子看護学生の母性看護学実習に対する思いと学びを明らかにし、今後の本学における母性看護学実習の教育的関わりを検討することを目的とし、本学の母性看護学実習を終了した男子看護学生7名に半構成的面接を実施した。

分析の結果、母性看護学実習に対する思いとして、実習前は【ネガティブな思い】が多かったが、実習後には【ポジティブな思い】が多く抽出され、【教科書的学習内容と臨地実習での学びの一致】【他領域での母性看護学の活用】【父親になった時の母性看護学の活用】という学びを得ていた。今後の母性看護学実習での教育的関わりを示唆する内容として、【直接見られない場合の対象の理解を促す関わり】【実習しやすい環境作り】【実習中の学習姿勢を示す関わり】が抽出された。

男子看護学生は看護師を目指す者として、【ネガティブな思い】を乗り越えるための解決策を母性看護学実習を通して自分自身で導き出していたのではないかと思われ、男子看護学生が、【ネガティブな思い】に直面した時、指導者は全てを教授する訳ではなく、学生自身で解決策を導き出せるような関わりが必要であると示唆された。

【キーワード】 男子看護学生 母性看護学実習 思い 学び 教育的関わり

I はじめに

1989年保健婦助産婦看護婦学校養成所指定規則の一部を改正する省令以降、男女平等の観点から母性看護実習が義務化され¹⁾、教育機関では男女の区別なく母性看護学実習が実施されるようになった。厚生労働省による就業保健師・助産師・看護師・准看護師の就業保健師等の年次推移を見ると、男性看護師人員、男性看護師の構成割合ともに2006年以降増加の一途を辿っている²⁾。本学でも1999年の看護学科設立以降、男子看護学生の割合は常に10%前後を占めている。

母性看護学実習は20代、30代の若い女性が対象となる産科病棟が主な学びの場であり、見学やケアの実施も乳房や陰部など女性にとって羞恥心の大きい部位となる。そのため、男子看護学生は、実習施設や実習の対象となる妊産褥婦から、見学やケアの実施に同意を得られない場合がある。また、男子看護学生からも授乳、分娩、内診などの見学やケアの実施に対し、不安や羞恥心といった思いを聞くことが多かった。

男子看護学生の母性看護学実習での学びとして、

井田らは、男子学生は母性実習において自分なりの結婚や出産に対する価値観を深め、看護職者に必要な命を大切に思う気持ちを再認識し、男性だからこそ夫の視点に沿った支援が必要であるといった学びを見出すことができていた、教員は男子学生が母性実習にいく意義を見出せるよう関わる必要がある³⁾と述べている。また、贅らは、実習中は対象者とのかわりを通して学生にとって必要な経験ととらえ、実習後は父親としての将来像についても考えていることがわかった⁴⁾と男子看護学生の学びを報告している。

しかし、母性看護学実習の内容は教育機関によって様々である。井田らの研究対象男子看護学生は、病院で2週間の実習を行い、1週間は産後の母子の受け持ち、他1週間は分娩期の看護や妊婦健康診査時の看護を学ぶ実習³⁾、また、贅らの研究対象男子看護学生は、1週間の病棟実習と1週間の地域の子育て支援センター実習とパパママ教室実習⁴⁾を実施しており、いずれも本学の母性看護学実習の内容とは異なる。

今後も本学において男子看護学生が増加していく

可能性は十分に予測される。そこで、本研究では本学の母性看護学実習の内容における男子看護学生の思いと学びを調査し、母性看護学実習の教育的関わりを考察することで、男子看護学生にとって母性看護学実習が学びの多い実習となるよう関わりたいと考えた。

II 研究目的

本学の男子看護学生が母性看護学実習に対してどのような思いを抱いて実習に臨んでいるか明らかにし、また、実際に母性看護学実習を行って得た学びを明らかにすることで、本学における今後の母性看護学実習の教育的関わりを検討する。

III 研究方法

1、研究デザイン

質的内容分析法

2、調査期間

2018年4月から2018年11月

3、調査対象

本学看護学科3年生で母性看護学実習を終了し、本研究に同意した男子看護学生7名

4、調査方法

母性看護学実習終了後に、インタビューガイドに沿って、本学母性看護学の担当教員である著者が1人につき約20分程度の半構成的面接1回を7名全員に行った。半構成的面接は著者の研究室で行い、内容は調査対象の許可を得てレコーダーに録音した。

5、調査内容

インタビューガイドの内容は、以下の通りである。

- ①母性看護学実習を受ける前、母性看護学実習に対する捉え方はどうでしたか？
特に、男子看護学生だからという理由で抱いていた思いがあれば教えてください。
- ②母性看護学実習中に困ったこと、悩んだことはありますか？
- ③母性看護学実習終了後、母性看護学実習の捉え方に変化はありましたか？
- ④男子看護学生が母性看護学実習を行う意義についてどう思いますか？
- ⑤母性看護学実習でより学びを得るために男子看護学生であることへの配慮として希望することはありますか？

6、データ分析方法

録音された半構成面接の内容を逐語録に起こし、男子看護学生の母性看護学実習に対する思い、母性看護学実習での学び、今後の母性看護学実習の教育的関わりを示唆する内容に関連する文脈を抽出し、コードとした。その後、男子看護学生の母性看護学実習に対する思いに関連するコードは、実習前・実習中・実習後の思いに分類し、内容の類似性・関係性を考慮し、小カテゴリーとして分類した。徐々に抽象度を上げ、中カテゴリー、大カテゴリーとし表現した。母性看護学実習での学びに関連するコードも同様に行った。今後の母性看護学実習の教育的関わりを示唆する内容に関連するコードは、同様の手順で、小カテゴリー、大カテゴリーとし表現した。各コード・カテゴリーは、その都度、逐語録に戻り、対象者の表現が反映されるよう配慮した。また、分析の信頼性・妥当性を高めるため、研究者全員で分析を行った。

7、倫理的配慮

調査対象には、研究の目的を説明し、参加は自由意志であり参加を拒否することによる教育・学生支援上の不利益は生じないこと、研究参加に同意した後でも同意の取り消しが可能であることを説明した。また面接では、話したくない内容は無理に答える必要はなく、面接の中断も可能であることを説明した上で行った。得られたデータは個人情報保護に努め、研究以外には利用しない旨を説明した。また、研究の結果は学会等で発表する可能性があることを説明した。以上を、書面にて説明し、署名による同意を得た。

尚、本研究は本学松本短期大学倫理研究委員会の承認を得た（承認番号201801）。

8、本学における母性看護学実習概要

1) 目的

妊産褥婦・新生児と関わり、妊産褥婦・新生児とそれを取り巻く家族の身体的・心理的・社会的状態を理解し、妊産褥期・新生児期のケアが実践できるための基本的能力（知識・技術）と臨床態度を身につける。

周産期にある女性の健康増進のための援助と、家族（親）役割を考察する。

2) 目標

- 1 妊婦健康診査の一部が実施でき、妊婦への看護が理解できる。
- 2 分娩期の看護計画が立案でき、分娩室での体験から学びがある。

- 3 新生児の観察と基本的な育児技術が実施でき、新生児への看護が理解できる。
- 4 褥婦の復古への看護が実施でき、褥婦への看護が理解できる。
- 5 産褥期・新生児期の看護過程の展開ができる。
- 6 看護学生として責任がある態度をとることができる。

3) 実習施設概要

- A 病院 年間分娩件数 約 600 件
- B 病院 年間分娩件数 約 500 件
- C 助産所 分娩、母乳支援、産後ケア等
- D 助産所 母乳支援、産後ケア等

4) 実習内容

看護学生は3～5名の男女混合の実習グループとなり10日間（臨地実習8日間）の母性看護学実習を行っている。学内実習は2日間で、実習初日に技術演習、最終日に母性看護学実習の学びに関するカンファレンスを行っている。A病院、B病院のいずれかで行う臨地実習は計7日間で、実習オリエンテーション、分娩実習、新生児室実習、産科外来実習をそれぞれ1日間、産褥・新生児期の褥婦・新生児の受け持ち実習を3日間としている。また、C助産所、D助産所のいずれかで行う助産所実習を1日間としている。

表1に母性看護学実習日程の例を示す。

表1 母性看護学実習日程表

曜日	パターン1	パターン2	パターン3	パターン4
月	学内演習			
火	<AM>学内オリエンテーション		<PM>病院オリエンテーション	
水	病棟（産褥・新生児期）		外来	分娩
木			新生児室	外来
金			助産所	
月	助産所		分娩	新生児室
火	外来	分娩	病棟（産褥・新生児期）	
水	新生児室	外来		
木	分娩	新生児室		
金	学内カンファレンス			

5) 指導体制

1グループにつき、本学教員1～2名を配置し実習指導を総括した。臨地実習では、各学生に実習施設の指導者1名がつき実習指導にあたった。男子看護学生がケアの見学や実施に同意を得られた場合には、優先して経験できるよう配慮した。

IV 結果

調査対象7名のうち、臨地実習で分娩見学ができた者は3名、授乳見学ができた者は3名、会陰部の観察ができた者は1名であった。

1、男子看護学生の母性看護学実習に対する思い

半構成的面接で得られた逐語録から合計129のコードが抽出された。分析方法に沿ってカテゴリー化を実施した結果、男子看護学生の母性看護学実習に対する思いは、実習前・実習中・実習後を通して【ネガティブな思い】と【ポジティブな思い】の2つの大カテゴリーに分類された。

以下、大カテゴリーを【 】, 中カテゴリーを「 」, 小カテゴリーを< >で表記する。

1) 男子看護学生の母性看護学実習に対する実習前の思い (表2)

男子看護学生の母性看護学実習に対する実習前の思いの総コード数は46であった。コード(語り例)は、各表の通りである。

【ネガティブな思い】は「妊産褥婦と夫に対する思い」「実習の学びが得られない可能性への不安」「将来携わらない領域に対する無意味感」「実習に行くしかない」と割り切る思いの4つの中カテゴリーから生成された。「妊産褥婦と夫に対する思い」は<妊産褥婦に対する申し訳なさ><相手に緊張が伝わることへの不安><夫の気持ちを想像してしまうことによる不安>の3つの小カテゴリー、「実習の学びが得られない可能性への不安」は<妊産褥婦に受け入れてもらえない可能性への不安><男子が看護を提供できるかという不安><直接観察できないことへの不安>の3つの小カテゴリー、「将来携わらない領域に対する無意味感」は<将来携わらない領域に対する無意味感>の1つの小カテゴリー、「実習に行くしかない」と割り切る思いの1つの小カテゴリー

表2 男子看護学生の母性看護学実習に対する実習前の思い

大カテゴリー	中カテゴリー	小カテゴリー	コード (語り例)	
ネガティブな思い	妊産褥婦と夫に対する思い	<妊産褥婦に対する申し訳なさ>	<ul style="list-style-type: none"> 一番見られたくない部分を見るのが申し訳ない 見たい気持ちもあるけど申し訳ない 授乳と分娩は見るのが申し訳ない 	
		<相手に緊張が伝わることへの不安>	<ul style="list-style-type: none"> 異性なので緊張が伝わるのではないか 	
		<夫の気持ちを想像してしまうことによる不安>	<ul style="list-style-type: none"> 夫の気持ちを考えると申し訳ない② 嫉妬深い夫だとどうしよう 	
	実習の学びが得られない可能性への不安	<妊産褥婦に受け入れてもらえない可能性への不安>	<ul style="list-style-type: none"> 先輩から断られると聞いていた 女性にしか理解できない気持ちがあるので断られるのではないか 観察させてもらえなかったらどうしよう 受け入れてくれるか心配 お母さんと関われるか心配 断られたら学びが得られない 	
		<男子が看護を提供できるかという不安>	<ul style="list-style-type: none"> 女性の領域だから男子は何もできないんじゃないか 男子が看護ができるか不安 女性だから気持ちの面で男子が手を出せないんじゃないか 若い女性にどこまで看護ケアを実施できるんだろう 	
		<直接観察できないことへの不安>	<ul style="list-style-type: none"> 自分の目で見ないと難しい 見られないと、カーテン越しで(分娩時の)音を聞いてアセスメントすると聞き、心配だった 授乳は見れないと思うと心配 	
	将来携わらない領域に対する無意味感	<将来携わらない領域に対する無意味感>	<ul style="list-style-type: none"> 自分が就職しない領域⑤ 助産師になるわけではない③ 行く必要がない② 男子が関われることが少ない 興味とするところが母性ではない 	
	実習に行くしかなないと割り切る思い	<実習に行くしかなないと割り切る思い>	<ul style="list-style-type: none"> しょうがないと割り切っていた② 行かないといけない実習なので行くしかな 	
	ポジティブな思い	他領域での母性看護学の活用	<他領域での母性看護学の活用>	<ul style="list-style-type: none"> 救急とか行ったら必要
		父親になった時の母性看護学の活用	<父親になった時の母性看護学の活用>	<ul style="list-style-type: none"> 自分に子どもができたときの知識になる
実習に対する不安感なし		<母性看護学に対する苦手意識なし>	<ul style="list-style-type: none"> 母性の授業で上手くいったから不安はない 	
		<受け入れてもらえないことへの不安感なし>	<ul style="list-style-type: none"> ものすごく不安があるわけではなかった 断られて困るという思いはなかった 見れない事は始まる前から意識していたので不安はない 	
		<対処法を考えていたことによる自信>	<ul style="list-style-type: none"> 断られたときの情報の取り方を考えていた② 断られたらその時考えよう 	
<性差を意識していないことから生じる思い>	<ul style="list-style-type: none"> 男子だからと意識してなかった 女性が苦手ではないので抵抗なかった 			

から生成された。コード数は35であった。

【ポジティブな思い】は「他領域での母性看護学の活用」「父親になった時の母性看護学の活用」「実習に対する不安感なし」の3つの中カテゴリーから生成された。「他領域での母性看護学の活用」は<他領域での母性看護学の活用>の1つの小カテゴリー、「父親になった時の母性看護学の活用」は<父親になった時の母性看護学の活用>の1つの小カテゴリー、「実習に対する不安感なし」は<母性看護学に対する苦手意識なし><受け入れてもらえないことへの不安感なし><対処法を考えていたことによる自信><性差を意識していないことから生

じる思い>の4つの小カテゴリーから生成された。コード数は11であった。

2) 男子看護学生の母性看護学実習に対する実習中の思い (表3)

男子看護学生の母性看護学実習に対する実習中の思いの総コード数は66であった。

【ネガティブな思い】は「妊産褥婦と夫に対する思い」「実習での学習上の困難感」「性差から感じる思い」の3つの中カテゴリーから生成された。「妊産褥婦と夫に対する思い」は<受け入れてもらえていない不安><見てはいけないという思い><不快感を与えているのではないかという思い><夫への

表3 男子看護学生の母性看護学実習に対する実習中の思い

大カテゴリー	中カテゴリー	小カテゴリー	コード (語り例)	
ネガティブな思い	妊産褥婦と夫に対する思い	<受け入れてもらえていない不安>	・男子だから許可が出ないかもしれない ・男子学生に関わられたくないんじゃないか	
		<見てはいけないという思い>	・見れたことは良かったが、見て申し訳ない ・見ちゃいけないと思って、自分の立ち位置はどこにいればいいか困った② ・頻回に訪室して授乳していたらどうしよう	
		<不快感を与えているのではないかという思い>	・恐る恐る触れて逆に不快感を与えるのではないか	
		<夫への申し訳なさ>	・同じ若い男性なので嫉妬の気持ちがあるんじゃないか ・(男子学生が)居るのが悪い④ ・旦那さんがいると部屋に入りづらい ・乳房の観察など男子学生が見ていると嫌な気分にならないか	
	実習での学習上の困難感	<直接観察できない内容を妊産褥婦に確認する際の困難感>	・お母さんの主観が強くなってしまう ・見れない中でお母さんの思いを考えるのが難しい ・見れない内容をどう褥婦さんに質問し情報収集するか悩んだ	
		<羞恥心のある内容を妊産褥婦に確認する際の困難感>	・授乳や外陰部のことを聞かれると羞恥心があるだろうと感じた ・羞恥心のあることを聞かれると戸惑っている様子を感じた ・羞恥心のある事を確認する時どう聞けば良いか悩んだ ・意識した訳ではないが、聞き方が遠回しになった ・質問しなきゃいけないことができない ・沈黙の時間ができてしまった	
		<直接観察できない内容を記録する際の困難感>	・授乳とか実際見れなかったから記録が書けない② ・分娩室で、カーテン越しで音を聞いてただけで記録をどう書けばいいかと思った②	
		<妊産褥婦の直接的ケア実施に対する困難感>	・女性の羞恥心のある場所に触れるのはやりづらい ・男子学生を受け入れてもらっているのは分かるが気を遣う ・やらなきゃいけないけど、やるにも気を遣って大変	
		<直接観察したいという思い>	・無理でもしようがないけど見たい ・見ないと情報収集できない部分は見たかった ・実際に見た方が学びになる ・褥婦さんの目で見ただけを聞いているから、実際の状態はどうなんだろうって思った ・見れたら楽だけど見れない②	
		性差から感じる思い	<男性であることの疎外感>	・病棟が特殊な環境で、男性は蚊帳の外、別次元の様な感じ ・男性のいる場所じゃない
	<男性がいないことによる心細さ>		・男性看護師がいないので心細かった ・指導者が女性だけなので心細い ・男性特有の思いを共有できない	
	ポジティブな思い	妊産褥婦に対する思い	<妊産褥婦に受け入れられていることによる不安の消失>	・褥婦さんに見なきゃ勉強にならないと言われて不安が消えた ・実際やると悩みはなかった ・見せてもらえるなら勉強のためと不安は抑えた ・信頼関係ができて不安はなくなった ・心を開いてくれたのが分かり、情報収集もできて安心した ・お母さんは寛大で、自分が考えすぎていて不安だったと分かった ・学ぶ姿勢があれば受け入れてくれると感じた
			<羞恥心のある部分を見せていただくことへの感謝の気持ち>	・見せてもらえることにすごく感謝を感じた
		学びを得られているという実感	<直接見られなくてもできたという感覚>	・当初から見れないことを意識していたのでイメージ通りだった ・事前準備をやっていたお陰で、見れなくても情報収集できた ・助産師さんの記録があるので問題なかった

		<複数回の経験の良さ>	・直接見れなかったけど分娩に2回立ち合え、2回目は経過や情報の項目が分かっていたので記録にできた
		<羞恥心のある部分を見せていただけることによる学習意欲の向上>	・羞恥心のある部分を見せて頂けることで、逆に自分の学びにしようという思いが強くなった
	看護学生であるという認識	<やらねばならないと割り切る気持ち>	・見られたくないものは見てもしょうがない ・学生であり医療従事者を目指す上で必要と割り切った ・やらなきゃいけないことはやらなきゃいけないと気持ちを変えた
		<男子看護学生ならではの視点>	・お父さんの視点でカンファレンスで意見が出せる③ ・旦那さんの立場に立って考えられる② ・男性の視点で、褥婦と会話ができる ・女子とは違った目線で気づくことがある②

表4 男子看護学生の母性看護学実習に対する実習後の思い

大カテゴリー	中カテゴリー	小カテゴリー	コード (語り例)
ネガティブな思い	十分に学習できなかったという思い	<十分に学習できなかったという思い>	・(見れないので) お母さんと話ができないと苦勞する ・(見れないので) アセスメントをやり切れず不安が残る ・授乳の様子が見れていれば理解できた
ポジティブな思い	実習から学びを得られたという思い	<意義のあった実習>	・記録は辛かったけど楽しくできた ・実際援助できなくても学びが得られた ・行くと学びはある③ ・実習に行って良かった③ ・良い経験になった
		<実習での課題の見出し>	・分娩から退院まで受け持ち実習ができれば理想的 ・分娩が見れていたら何ができたかと思う
		<看護の仕事の素晴らしさ>	・助産師に憧れた ・助産師の仕事を尊敬する気持ちが沸いた ・看護がより素晴らしい仕事と感じた

申し訳なさ>の4つの小カテゴリー、「実習での学習上の困難感」は<直接観察できない内容を妊産褥婦に確認する際の困難感><羞恥心のある内容を妊産褥婦に確認する際の困難感><直接観察できない内容を記録する際の困難感><妊産褥婦の直接的ケア実施に対する困難感><直接観察したいという思い>の5つの小カテゴリー、「性差から感じる思い」は<男性であることの疎外感><男性がいないことによる心細さ>の2つの小カテゴリーから生成された。コード数は42であった。

【ポジティブな思い】は「妊産褥婦に対する思い」「学びを得られているという実感」「看護学生であるという認識」の3つの中カテゴリーから生成された。「妊産褥婦に対する思い」は<妊産褥婦に受け入れられていることによる不安の消失><羞恥心のある部分を見せていただけることへの感謝の気持ち>の2つの小カテゴリー、「学びを得られているという実感」は<直接見られなくてもできたという感覚><複数回の経験の良さ><羞恥心のある部分を見せていただけることによる学習意欲の向上>の3つの小カテゴリー、「看護学生であるという認識」は

<やらねばならないと割り切る気持ち><男子看護学生ならではの視点>の2つの小カテゴリーから生成された。コード数は24であった。

3) 男子看護学生の母性看護学実習に対する実習後の思い (表4)

男子看護学生の母性看護学実習に対する実習後の思いの総コード数は17であった。

【ネガティブな思い】は「十分に学習できなかったという思い」の1つの中カテゴリーから生成され、小カテゴリーは<十分に学習できなかったという思い>の1つであった。コード数は3であった。

【ポジティブな思い】は「実習から学びを得られたという思い」の1つの中カテゴリー生成され、「実習から学びを得られたという思い」は<意義のあった実習><実習での課題の見出し><看護の仕事の素晴らしさ>の3つの小カテゴリーから生成された。コード数は14であった。

2. 男子看護学生の母性看護学実習での学び (表5)

男子看護学生の母性看護学実習での学びは、合計

表5 男子看護学生の母性看護学実習での学び

大カテゴリー	中カテゴリー	小カテゴリー	コード (語り例)
臨地実習での学びの一致 教科書的学習内容と	母性看護学の特徴の理解	<ウェルネス志向の考え方の理解>	・ウェルネスの考え方が学べた
		<チーム・社会との連携の広さの理解>	・家族や地域の関りが学べた ・妊娠期からの介入が必要だと分かった ・病院内の連携が分かった ・様々なチームが関連していることが分かった
		<命について考える機会>	・命の誕生がどのようにしているのか学べた ・命の根源を知った ・命に関して考える機会になった ・命の誕生を産婦にとって特別な思い出になるように関わる必要があると分かった
		<女性の身体の理解>	・女性ならではの身体の働きを学べた ・男子とは違った女性の身体の働きを見て学べた ・教科書とは違って、見て理解できた
	妊産褥婦の気持ちを考える機会	<妊産褥婦の気持ちを考える機会>	・命の誕生で変わる母親の気持ちを知った ・自分が経験することのない気持ちを知れた ・教科書にはない気持ちの部分が学べた
他領域での母性看護学の活用	母性看護学の特徴から導き出される活用	<ウェルネス志向の他科領域への活用>	・疾患にとらわれていたが、正常な部分をより良くという観点が生かせる ・できたことを認めていく看護は他の領域でも生かせる
		<保健指導方法の他科領域への活用>	・色んな指導が見れて、指導や支援の仕方は他の実習でも生かせる ・家族背景を詳しく把握する必要があると分かった
	女性への看護の視点	<女性への看護の視点>	・女性の目線に近づけた ・患者さんは高齢でも女性は女性という目で見られるようになった ・他領域でも女性と触れ合う機会はあるので、女性だからできませんということは言えないから、学生のうちに学んでおく必要がある ・羞恥心のある部分を見られることに対する看護を学んだ
	患者の主体性を尊重した看護	<患者の主体性を尊重した看護>	・他の領域でも患者さんの思いに寄り添い、何を感じているかを感じようと思うようになった ・自分のペースでなく、患者のリズムに合わせて援助するという形を学んだ ・自分が主体ではなく、患者の生活に合わせていくという所が他の領域でも生かせる
	看護師としての感性を磨く	<看護師としての感性を磨く>	・理論でなく、素直に感じて気持ちを考えるという目線が分かった ・看護師としての感受性を養われた② ・患者さんを見て、感じて、観察する能力がついた ・出産の雰囲気、生まれた瞬間の空気の変化を感じる体験をしておくことで、いつもと違う患者の変化に気づくんじゃないか ・見れなかったのが、逆に患者の気持ちをしっかり想像するようになった
母親になった時の母性看護学の活用	父親になった時の母性看護学の活用	<父親になった時の母性看護学の活用>	・将来、奥さんができた時にアドバイスできる ・将来、分娩に立ち会った時に妻の気持ちを考えられる ・赤ちゃんを抱けて父性の形成につながった ・男性は産まない中で、奥さんにどんなことができるか考える機会になった ・赤ちゃんの人生初の沐浴をさせてもらえ、良い経験になった

37のコードが抽出され、分析の結果、【教科書的学習内容と臨地実習での学びの一致】【他領域での母性看護学の活用】【父親になった時の母性看護学の活用】の3つの大カテゴリーに分類された。

【教科書的学習内容と臨地実習での学びの一致】は「母性看護学の特徴の理解」「妊産褥婦の気持ちを考える機会」の2つの中カテゴリーから生成さ

れた。「母性看護学の特徴の理解」は<ウェルネス志向の考え方の理解><チーム・社会との連携の広さの理解><命について考える機会><女性の身体の理解>の4つの小カテゴリー、「妊産褥婦の気持ちを考える機会」は<妊産褥婦の気持ちを考える機会>の1つの小カテゴリーから生成された。コード数は15であった。

表6 男子看護学生に対する今後の母性看護学実習での教育的関わりを示唆する内容

大 カテゴリー	小カテゴリー	コード（語り例）
直接見られない場合の 対象の理解 を促す 関わり	<実習前に直接観察できない可能性を示す>	・初めから見れない可能性を言われていたので、どうすればいいか考えて実習に望めた
	<直接観察できない可能性を想定し事前準備する>	・できなくて当たり前と思っていれば、できた時に良かったと思える ・女性の羞恥心を伴う科なので拒否されてもしょうがないので、できることをした方がいい ・看護師になっても同じようなことがあるだろうし、開き直りと、どうすればいいか考えておけばいい ・実際に見たり、援助に入れなくても、聞く項目をきちんと考えておけば情報を取れる
	<直接見られなくても分娩室の雰囲気を経験する>	・分娩の時に、カーテン越しでも、状況を代弁してもらえて、イメージがついた ・直接見れなかったけど、分娩に2回立ち会えて、2回目は経過や情報が分かっていたので記録ができた ・見れなくても、自分の事前学習を踏まえて説明してもらえると、分娩の場にいれば分かりやすい
	<個人の経験差を是正する関わり>	・体験に差が出てしまうのが、何とかなれば良い ・自分が見れない分、女子学生の経験を聞けることはプラスになった
実習 しやすい 環境作り	<受け持ち妊産褥婦選定時の配慮>	・男子学生と関われる受け持ちの褥婦さんを選定してもらえた ・受け持ち褥婦さんは年齢が近いとお互いに遠慮してしまうので、歳が離れていた方が良い ・分娩も男子の許可がおりたら優先的に見せてもらえると安心する
	<複数男子がいることで悩みを相談できる実習グループ作り>	・グループに2人男子がいると心強い
	<看護ケアの見学や実施の可否を明確に示す>	・しっかり許可があれば良いかなと思って見れる ・どこまで自分が見ていいか明確だと気兼ねしない ・どこまで良くて、どこからだめかを明確にしてほしい
	<羞恥心を伴う看護ケアや会話時に指導者が一緒にいることの意義>	・お母さんに話聞く時に、男子1人だと気まずい空気が流れると感じたから、一緒にいてもらえると安心 ・お母さんも男子と1対1で話すより話しやすそうな気がした ・子宮底を測るときも一緒にいてくれることで、褥婦さんも和む雰囲気があった ・一緒に測ろうと言ってもらえて学びにつながった ・技術をリードしてくれることで、褥婦さんの恥じらいが減り、学習のために実施しているという感覚にお母さんがなっていたと思う ・乳房の観察をしたいと自分の口からは言いにくかったが、指導者が聞いてくれて観察しやすい環境を作ってくれた
	<学生が悩みを相談できる受容的態度>	・お母さんとの関わりで悩んだ時に一緒に話し合ってくれて良かった
	<男子に対し排他的でない関わり>	・男子だから関係ないという態度ではなかった ・女子看護学生と変わらない接し方をしてくれた
実習中の 学習姿勢を 示す関わり	<看護師を目指す者として関わる姿勢>	・具体的にしっかり聞いた ・男子を意識せず聞きたいことを聞く ・恥ずかしがらずに聞いたほうが良い ・学生が聞きにくそうにするとお母さんも答え辛そうだったので、情報として知りたいから聞くというスタンスが一番良い ・自分のやらないといけないことという気持ちを大きく持っていたことでしっかりと援助ができた ・羞恥心があってもやるならやるでやってもらえた方が気兼ねしないという意見を女子学生からもえ、うまく援助につながった
	<学ぼうとする積極的な態度>	・お母さんは学ぶ姿勢があれば受け入れてくれる ・見れるなら積極的に見せてもらった方が学びに繋がる
	<妊産褥婦との信頼関係構築のための工夫>	・お母さんとコミュニケーションをしっかりとって信頼関係を作れば上手いく② ・赤ちゃんの話題とかから、徐々に話を広げ、聞きたいことを聞いた ・病室に入る前も、必ず入っていいか声をかけた

【他領域での母性看護学の活用】は「母性看護学の特徴から導き出される活用」「女性への看護の視点」「患者の主体性を尊重した看護」「看護師としての感性を磨く」の4つの小カテゴリーから生成された。「母性看護学の特徴から導き出される活用」

は「ウェルネス志向の他領域への活用」「保健指導方法の他領域への活用」の2つの小カテゴリー、「女性への看護の視点」は「女性への看護の視点」の1つの小カテゴリー、「患者の主体性を尊重した看護」は「患者の主体性を尊重した看護」の1つの小カ

テゴリー、「看護師としての感性を磨く」はく看護師としての感性を磨く>の1つの小カテゴリーで生成された。コード数は17であった。

【父親になった時の母性看護学の活用】は、「父親になった時の母性看護学の活用」の1つの中カテゴリーから生成され、小カテゴリーはく父親になった時の母性看護学の活用>の1つであった。コード数は5であった。

3、男子看護学生に対する今後の母性看護学実習での教育的関わりを示唆する内容（表6）

男子看護学生に対する今後の母性看護学実習での教育的関わりを示唆する内容は合計38のコードが抽出され、分析の結果、【直接見られない場合の対象の理解を促す関わり】【実習しやすい環境作り】【実習中の学習姿勢を示す関わり】の3つの大カテゴリーに分類された。

【直接見られない場合の対象の理解を促す関わり】は、く実習前に直接観察できない可能性を示すく直接観察できない可能性を想定し事前準備するく直接見られなくても分娩室の雰囲気を経験するく個人の経験差を是正する関わり>の4つの小カテゴリーから生成された。コード数は10であった。

【実習しやすい環境作り】は、く受け持ち妊産褥婦選定時の配慮く複数男子がいることで悩みを相談できる実習グループ作りく看護ケアの見学や実施の可否を明確に示すく羞恥心を伴う看護ケアや会話時に指導者が一緒にいることの意義く学生が悩みを相談できる受容的態度く男子に対し排他的でない関わり>の6つの小カテゴリーから生成された。コード数は16であった。

【実習中の学習姿勢を示す関わり】は、く看護師を目指す者として関わる姿勢く学ぼうとする積極的な態度く妊産褥婦との信頼関係構築のための工夫>の3つの小カテゴリーから生成された。コード数は12であった。

V 考察

本研究の結果を踏まえ、男子看護学生の母性看護学実習に対する思いと学び、男子看護学生に対する母性看護学実習の今後の教育的関わりを考察する。

1、男子看護学生の母性看護学実習に対する思いと学び

男子看護学生の母性看護学実習に対する実習前の思いとして多く語られたのは、【ネガティブな思い】であり、【ポジティブな思い】は【ネガティブな思い】の半数以下だった。これらの思いは、研究背景として把握していたケアの見学や実施に対する不安や羞

恥心など男子看護学生の声を反映する内容であったと思われ、贅ら、畠中ら、大野らの先行研究でも本研究と同様の結果^{4) 5) 6)}が報告されている。また、研究前には把握していなかった「将来携わらない領域に対する無意味感」も【ネガティブな思い】として多く語られていた。佐藤らは、母性看護学実習での男子看護学生のモチベーションを低下させる要因として、これと同様の思いを報告⁷⁾している。男子看護学生は母性看護学実習前に母性看護学実習を行う意義や自分が得られる学びをイメージできていない結果、母性看護学実習に対し、消極的な姿勢で臨むことになってしまっている状況にあると考えられた。また、市川らは、男子看護学生は性差による葛藤や困難さが明らかに存在し、教員は、男子看護学生が感じたり体験する困難の内容を理解し、学習環境整備や指導をしていく必要がある⁸⁾と述べている。指導者は、男子看護学生が母性看護学実習前に多くの【ネガティブな思い】があることを知り、その思いを受け止めておく必要があると考える。

男子看護学生の母性看護学実習に対する実習中の思いとして、「妊産褥婦と夫に対する思い」「実習での学習上の困難感」「性差から感じる思い」に表出された【ネガティブな思い】は、先行研究でも畠中らや大野らや羽田野がそれぞれ報告^{5) 6) 9)}しており、同様の結果であると言える。しかし、実習中の思いでは、【ネガティブな思い】と【ポジティブな思い】のコード数の比率は、実習前より【ネガティブな思い】が軽減し、【ポジティブな思い】の割合が増加している結果となった。このことから、男子看護学生は母性看護学実習を通して、母性看護学実習を受けることの意義を見出してきているのではないかと思われた。これは、男子看護学生が妊産褥婦や指導者とコミュニケーションを取り、徐々に信頼関係が構築されたことが要因ではないかと思われる。贅らも、実習前の思いとして、性差による疎外感から不安を抱え、実習参加に消極的になっているが、実際に対象者と関わるにより、実習を楽しみと感じ、不安は消失していく⁴⁾と述べている。母性看護学実習の中で妊産褥婦や指導者と信頼関係を構築することで、母性看護学実習が楽しいと感じ、積極的に母性看護学実習に臨めるようになれば、性差を必要以上に意識せず、看護学生として母性看護学実習を行うことの必要性を認識していけるのではないかと思われる。大野らは、男子看護学生の抱く困難感は看護者を目指す者の意識でなく、一個人としての男性の意識で対象を捉えているために生じるのではないか、又、対象中心の考え方ではなく自分中心の意識へと傾くにつれて性差への意識が強くなり困難感が生じるのではないかと推測している。男子看

護学生が母性看護学実習を通し、性差による【ネガティブな思い】を乗り越え、「学びを得られているという実感」や「看護学生であるという認識」といった【ポジティブな思い】を感じる事ができれば、より多くの学びにつながると思われる。また、父親の立場や男性の立場からの意見が出せるといった男子看護学生ならではの視点<は、性差があるからこそ表出された【ポジティブな思い】と言える。男子看護学生の男性としての視点に、我々指導者もはっとすることが多々あるが、母性看護学実習の環境は、指導者も患者である妊産褥婦も女性であることがほとんどである。男子看護学生の男性としての思いが、女性であれば思い付かないような看護につながる可能性もある。また、女子看護学生にとっても男子看護学生の意見を聞くことで実習グループ全体の学びにつながっていくと思われ、男子看護学生の男性としての看護の視点も大切にしていきたいと考える。

母性看護学実習の実習後の思いでは、【ネガティブな思い】のコード数を【ポジティブな思い】のコード数が逆転し、「実習から学びを得られたという思い」として【ポジティブな思い】が多く語られるようになった。また、男子看護学生の母性看護学実習での学びにでも、【教科書的学習内容と臨地実習での学びの一致】【他領域での母性看護の活用】【父親になった時の母性看護学の活用】として、多くのコードが表出されていた。本研究の背景にも述べた通り、先行研究では男子看護学生の母性看護学実習での学び^{3) 4)}は報告されていたが、先行研究とは異なる母性看護学実習の内容にあたる本学の母性看護学実習においても男子看護学生は多くの学びを得ていたと考えられる。特に、実習前は「将来携わらない領域に対する無意味感」を多くの学生が抱いていたが、実習後には母性看護学実習での学びの中で【他領域での母性看護の活用】として、看護師として働く上で生かせる学びが表出されていた。このことにより、男子看護学生が将来どんな領域に進んだとしても看護師として働く上で、母性看護学実習での学びがにつながる可能性が示唆され、単に義務として母性看護学実習を行うのではなく、母性看護学実習を通して多くの学びが得られるように指導者も介入する意識が必要だと考える。また、実習後の思いとして<十分に学習できなかったという思い>という【ネガティブな思い】に関しては、次項の今後の母性看護学実習の教育的関わりを示唆する内容にて、この思いを踏まえ、考察していくこととする。

2、男子看護学生に対する今後の母性看護学実習の教育的関わりを示唆する内容

1) 【直接見られない場合の対象の理解を促す関わり】

男子看護学生は、実習前・実習中の思いとして「実習の学びが得られない可能性への不安」「実習での学習上の困難感」といった直接見られないことへの【ネガティブな思い】を表出していた。本研究の結果でも、男子看護学生で乳房・分娩・外陰部の観察をできた者は半数以下であり、今まで母性看護を経験したことのない男子看護学生にとって、直接対象の状況を見られないことで、対象の状況が理解し難くなることは容易に考えられる。実習後の<十分に学習できなかったという思い>も直接見られなかったことによる対象の理解不足が原因の一つと考えられる。先行研究の中で、藤田らは、意図的な情報収集について模擬患者を対象に、実践的な演習を取り入れることで、助産学生が問診や援助の方法についての学習を深めることができる⁸⁾と述べており、男子看護学生の場合も、指導者は、直接観察できない可能性を示すことで、男子看護学生が直接観察できない可能性を想定しどのように情報収集をしていくかを事前に準備できるよう関わる必要があると思われる。学生が実際の授乳の様子や分娩などの様子をDVD、模型、シュミレーターなどを使いながらイメージできるよう関わったり、直接観察できない場合を想定し、どのような質問や声掛けを行えば対象の状態が理解できるか具体的に考えるよう助言することが有効かと考える。女子看護学生を母親役に見立て、男子看護学生が羞恥心のある内容や直接観察できない内容についての質問や声掛けをロールプレイしておくことも有効であると考えられる。母性看護学実習に関わらず、同じ実習グループの仲間が困難に向き合った時、他人事ではなく実習グループ全員で協力し問題解決しようと団結することは、実習グループ全体の成長にもつながっていくと思われる。また、看護ケアの見学や実施を実際に行えた他の看護学生から話を聞ける場を設定し、経験を共有できるよう関わる必要もある。本研究で、分娩や授乳の状況を直接観察できない場合でも、男子看護学生は母性看護学実習の学びを自ら見出していることが分かった。観察できないから出来ないではなく、観察できない中でどうしていけばいいのかを男子看護学生自身が考えられる指導者の関わりが必要であると思われる。

2) 【実習しやすい環境の設定】

男子看護学生は、実習前・実習中の思いとして、「実習の学びが得られない可能性への不安」「妊産褥

婦に対する思い」「性差から感じる思い」といった【ネガティブな思い】を表出していた。男子看護学生は少数であるため実習グループに1人であるということも多いが、可能であれば男子看護学生が複数となるように配置し、男子看護学生が安心できるような環境を整える必要があると思われる。また、畠中らは、褥婦からの承諾が得られていることを言葉にして伝え、同席する際にも学生が傍観者とならないように関りを促し、いづらさが軽減できるように配慮する必要がある⁵⁾と述べている。初めて妊産褥婦に関わる際は、妊産褥婦から承諾が得られていることをしっかりと提示し、男子看護学生が拒否されているわけではないという事実を男子看護学生に伝え、自分が受け入れられているという感覚を得られるよう関わっていく必要があると思われる。また、初めて看護ケアを行う際には一緒に行ったり、会話を行う際にも同席し指導者が男子看護学生と妊産褥婦の橋渡しとなるよう介入していく必要があると思われる。その際も、指導者が全てをリードしてしまい、男子看護学生が指導者に依存的にならないよう注意が必要である。また、贅らは、教員は、実習前、実習中、実習後と変化する学生の思いをくみ取り、その変化に応じたかかわりをすることによって、実習前の不安の軽減を図るとともに、男子学生の学習意欲を引き出すサポートが求められる⁴⁾としている。指導者が、男子看護学生の思いに寄り添い、共感し、悩みを共に乗り越えようとする関わりが必要であると思われる。

3) 【実習中の学習姿勢を示す関わり】

伊藤らは、学生の実習態度が受け持ち対象の男子学生の受け入れをよくする¹¹⁾ことを明らかにしている。すなわち、男子看護学生の積極的に学ぼうとする姿勢があれば、妊産褥婦の協力は得やすくなる¹²⁾と考えられる。実際、男子看護学生を快く受け入れて下さり、学生の学びになれば嬉しいと言って下さる妊産褥婦も多い。そのような思いで受け入れて下さっている妊産褥婦に対し、積極的な母性看護学実習の姿勢は伝わるものであり、積極的に学ぼうとする姿勢が妊産褥婦との早期の信頼関係の構築につながる場合も多い。指導者に対する印象も同様であり、男子看護学生のやる気や積極的に学びを得ようとする姿勢が、指導者のモチベーションを上げ、男子看護学生の学びのために力になっていきたいと感じる。また、畠中らは、母性看護学実習は、性差意識が軽減すると同時に学生自身が成長する⁵⁾と述べている。性差意識は、我々指導者にとっても言えることかもしれない。男子看護学生の思いを尊重しながら、男子だからと言って過剰に特別視しない関

わりも指導者にとって必要だと思われる。

以上より、本研究では男子看護学生の母性看護学実習に対する多くの思いと、男子看護学生が母性看護学実習の中で成長し多くの学びを得ていることを把握できた。男子看護学生は、母性看護学実習の実習前や実習中に、【ネガティブな思い】を抱きながらも、【ネガティブな思い】を乗り越えるため、母性看護学実習を通し、妊産褥婦や新生児、指導者との関わる中で、看護師を目指す者として目の前の現実を受け止め、様々な解決策を自分自身で考え導き出していたのではないかと考える。指導者は、男子看護学生が【ネガティブな思い】に直面した時、指導者が全て教授する訳ではなく、学生自身で解決策を導き出せるような関わりが必要ではないかと思われる。そして、母性看護学実習に対し、【ポジティブな思い】を抱ければ、男子看護学生は他領域の実習と同じように母性看護学実習も主体的に進めることができ、より多くの学びを得られるのではないかと考える。

3. 本研究の限界と課題

本研究では対象者が7名と少数であるが、2018年度母性看護学実習を終了した男子看護学生の全員を対象に調査を行えたことから、分析可能なデータの確保はできた¹³⁾と考える。しかし、男子看護学生個々の実習内容の経験の差によって思いや学びに差が生じた可能性、又、面接が1度であり対象者の表現を忠実に反映しきれていない可能性や、実習評価前に半構成的面接を行ったため対象者の語りに影響が生じた可能性が考えられる。今後は、実習中のどのような体験が男子看護学生の思いに変化を与えたかを含め、より多くの男子看護学生を対象に研究を重ねていく必要がある。

VI 結論

本学の3年生である男子看護学生7名を対象に、男子看護学生の母性看護学実習に対する思いと学びの調査として、半構成的面接調査を行い、分析を行ったところ、以下の結果が得られた。

- 1) 男子看護学生の母性看護学実習に対する思いとして、実習前は【ネガティブな思い】が多かったが、実習後には「実習から学びを得られたという思い」という【ポジティブな思い】が多く抽出された。
- 2) 男子看護学生の母性看護学実習での学びとして、【教科書的学習内容と臨地実習での学びの一致】【他領域での母性看護学の活用】【父親になった時の母性看護学の活用】が抽出され、男子看護学生は本学の母性看護学実習において学びを得てい

- た。
- 3) 男子看護学生に対する今後の母性看護学実習での教育的関りを示唆する内容として、【直接見られない場合の対象の理解を促す関り】【実習しやすい環境作り】【実習中の学習姿勢を示す関わり】が抽出された。
 - 4) 男子看護学生は、看護師を目指す者として、【ネガティブな思い】を乗り越えるため、母性看護学実習を通して自分自身で解決策を導き出していたのではないかと示唆された。
 - 5) 男子看護学生が【ネガティブな思い】に直面した時、指導者は全てを教授する訳ではなく、学生自身で解決策を導き出せるような関わりが必要であると示唆された。

VII おわりに

本研究を通し、男子看護学生は多くのネガティブな思いを抱え母性看護学実習に臨みながらも、多くの学びを得ていることが分かった。男子看護学生にとって、母性看護学実習での体験は、看護学生でなければ体験することのないであろう貴重な体験である。貴重な体験から得た多くの学びを今後看護師となった時の糧として、是非生かしてもらいたい。

また、指導者は、本研究で考察された母性看護学実習での教育的関りを基に、今後も男子看護学生の思いに寄り添いながら、女子看護学生も含め全看護学生が母性看護学実習においてより多くの学びを得られるよう看護教育に携わっていく必要があると思われる。

最後に、本学の母性看護学実習を快く受け入れて頂いている実習施設の皆様、妊産褥婦様とご家族の皆様、実習指導に当たって下さっている非常勤助手の先生方に深く感謝を申し上げます。また、本研究にご協力頂いた本学男子看護学生の皆様に深く感謝致します。

引用文献

- 1) 衆議院：産科における男子学生実習に関する質問主意書，2016.
- 2) 厚生労働省：平成28年衛生行政報告例（就業医療関係者）の概況，p 1-2，2017.
- 3) 井田歩美、斎藤早苗：母性看護学実習における学生の学びと実習目標との関連性，ヒューマンケア研究学会誌，第2巻，p 36-40，2011.
- 4) 贅育子、小幡孝志、室津史子：母性看護学実習における男子学生の思い，ヒューマンケア

研究学会誌，第5巻2号，p 29-36，2014.

- 5) 畠中佳織、峯馨、林ひろみ：母性看護学実習における男子学生の実習前・実習中・実習後の体験，千葉県立衛生短期大学紀要，第26巻第1号，p 89-95，2007.
- 6) 大野理恵、長鶴美佐子：男子看護学生が母性看護学実習前から実習終了までに抱く困難感，第48回日本看護学会論文集 看護教育，p 79-82，2018.
- 7) 佐藤愛、高橋由美子、寄本飛鳥、他：母性看護学実習での男子看護学生のモチベーションに影響する要因，青森県立保健大学雑誌18，p 15-22，2018.
- 8) 市川裕美子、佐藤真由美、坂本弘子：男子看護学生が感じている学習上の困難の内容，八戸短期大学研究紀要第36号，p 77-85，2013.
- 9) 羽田野花美、末永芳子、中島由紀子、他：男子学生の母性看護学実習の現状と課題，保健科学研究誌 No.11，p 1-7，2014.
- 10) 藤田小矢香、狩野鈴子、濱村美和子、他：1年過程で学ぶ助産師学生が妊娠期の講義・演習で習得したと感じたこと，日本助産学会誌資料，p303-309，2015.
- 11) 伊藤千恵、松井幸子、大野絢子、他：男子学生の母性看護学実習における教育的配慮の考案，群馬パース大学紀要 No.6，p 81-89，2007.